



すみりんニュース

へんしゅう はっこう こうえきざいだんほうじん すみよしりん ぼ じ ぎょうすいしんきょうかい
編集・発行：公益財団法人 住吉隣保事業推進協会
へんしゅうはっこうにん り じ ちよう ともなが けんぞう
編集発行人：理事長 友永 健三

Vol.
102

こうえきざいだんほうじん すみよしりん ぼ じ ぎょうすいしんきょうかい おおさか し すみよし く て づかやまひがし
公益財団法人 住吉隣保事業推進協会 〒558-0054 大阪市住吉区帝塚山東 5-6-15
TEL (06) 6674-3732 FAX (06) 6674-3700 <http://www.sumiyoshi.or.jp>



2025年度すみよし連続講座「人権のまちづくりを考える」記念講演会のようす（2025年4月）



こんごう ねん ど じんけん かんが ねんぞくこうざ きねん
今号では、2025年度「人権のまちづくりを考える」すみよし連続講座記念
こうえんかい ほうこく けいさい さん か しゃ にん さん か
講演会の報告を掲載します。参加者は、56人でした。ご参加いただきましたみ
なさまありがとうございました。当日はまず、当財団理事長の友永健三よりあい
さつをさせていただきました。本紙に掲載していますのでご覧ください。つづいて
ほうせいだいがくきょうじゅ やまぐち じろう はいせん ねん にほん すず ほうこう だい
法政大学教授の山口二郎さんに「敗戦80年、日本の進むべき方向」と題して
ご講演いただきました。質疑も含めた内容を掲載しています。
こんごう してん しめん かんけいじょう やす
今号の「けんぞうの視点」は、紙面の関係上お休みです。



- 2025年度「人権のまちづくりを考える」すみよし連続講座
きねんこうえんかい ほうこく
記念講演会の報告……………1-22
- 住吉隣保事業推進協会のうごき……………23-24

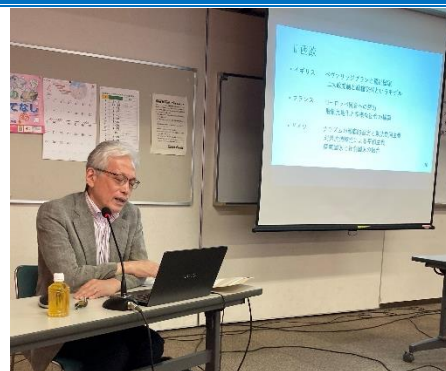
すみりんニュースをP D Fファイルでお届けします！

すみりんニュースなどをP D Fファイルでお届けすることもできます。
ご希望の方は、以下までお知らせください。

★事務局メールアドレス sumiyoshi3731@gmail.com



ねん ど じんけん かんが
2025年度「人権のまちづくりを 考える」
れんぞくこう ざ き ねんこうえん ほうこく
すみよし連続講座 記念講演 報告
はいせん ねん に ほん すす ほうこう かんが
『敗戦80年、日本の進むべき方向を 考える』
やまぐち じ ろう ほうせいだいがく ほうがく ぶ きょうじゅ
山口二郎さん(法政大学法学部教授)
ねん がつ にち ど よう び ご ぜん じ ぶん じ ぶん
2025年4月26日(土曜日) 午前1時30分から 3時30分
かいじょう すみよしじゅうたくしゅうかいしょ
会場:住吉住宅集会所



ごあいさつ

こうえきざいだん ほうじん すみよしりん ぼ じ ぎょうすいしんきょうかい
公益財団法人住吉隣保事業推進協会
り じ ちよう ともなが けんぞう
理事長 友永 健三

ねん ど じんけん かんが
2025年度「人権のまちづくりを 考える」すみ
れんぞくこう ざ き ねんこうえんかい さん か
よし連続講座記念講演会にご参加くださり、あり
がとうございます。

きんねん まいとし がつちゆう げ じゅん とし じゅうてん て
近年は、毎年4月中・下旬に、その年の重点テ
ーマを取り上げて記念講演会を開催してきており
ますが、本年は、さまざまな面で節目の年に当た
っていますことから「敗戦80年、日本の進むべき
ほうこう かんが て ー ま ほうせいだいがく やまぐち じ
方向を 考える」をテーマに、法政大学の山口二
郎先生にお越しいただきました。



わたしは、今年で60年近く、部落解放運動に
さんか 参加してきていますが、そのなかで、平和を守り、
じんけん そんちよう もっと たいせつ しん
人権を尊重することが最も大切なことだとの信
ねん いだ へい わ まも じんけん そん
念を抱いてきています。この平和を守り、人権が尊
ちよう たいせつ ふた おも
重されるために大切なことが二つあると思ってい
ます。一つは、歴史から学ぶということです。もう
ひと れきし まな ひと
一つは先人たちによる苦闘の結果、築き上げてくれ

あしば かつよう
た「足場」を活用することです。
ぐ たいてき はなし ことし しゅうけつ ねん おか
具体的な話をしますと、今年で終結80年を迎
えた第2次世界大戦の経験があります。人類に多
だい さん か およ せんそう はんせい じんるい た
大な惨禍を及ぼしたこの戦争の反省のなかから
さ べつ てっばい じんけん そんちよう こうきゅうへい わ
「差別を撤廃し、人権を尊重することが恒久平和
じつげん つう きょうく だ
を実現することに通じる」という教訓を生み出した
おも と思います。そして、この教訓を生かすために
ねん がつ こくさいれんごう こくれん そうせつ
1945年10月に国際連合(国連)を創設し、
ねん がつ こくれん だい かいそうかい せ かい
1948年12月、国連の第3回総会において、世界
じんけんせんげん さいたく に ほん あ じ あ たいへい
人権宣言を採択しました。日本では、アジア・太平
ようせんそう はんせい ねん がつ
洋戦争を反省することのなかから1946年11月
に ほんこくけんぽう せいてい よくねん がつ し こう
に日本国憲法を制定し、翌年5月から施行されま
した。

こんにち せ かい に ほん へい わ じんけん かんてん
今日、世界も日本も、平和と人権という観点か
み きわ あやう げんじよう お
見ると、極めて危い現状に置かれているのでは
ないでしょうか。たとえば、アメリカでは第2次トラ
ん ぶせいけん たんじよう ながねん あめりか こくない
ンプ政権が誕生し、長年にわたってアメリカ国内
きず あ じんけん き じゅん ぜんめんてき こうげき
で築き上げられてきた人権基準が全面的な攻撃
う を受けています。日本においても、日本国憲法の
だい じよう じ たい しんこう
第9条がないがしろにされる事態が進行していま
す。

じ き だい じ せ かいたいせん はん
こうした時期だからこそ、第2次世界大戦の反
せい まな た がえ せ かいじんけんせんげん
省から学んだことに立ち返り、世界人権宣言をは
じめとした国際的な人権基準を活用していく取り
く に ほんこくけんぽう へい わ じんけん かん きてい
組み、日本国憲法の平和と人権に関する規定を
まな と く かつよう
学びかえし、さまざまな取り組みに活用していくこ
とが求められているのではないのでしょうか。

てん やまぐちせんせい はいせん
その点では、これから山口先生から「敗戦80

ねん に ほん すす ほうこう かんが てーま
年、日本の進むべき方向を「考える」をテーマにお
はなし
話をさせていただきますが、わたしたちがこれから
なに
何をどうしていくのかを かんが 考えていくうえで、いろい
ろと有意義なヒントを与えていただけるのではな
いかと期待をいたしているところです。

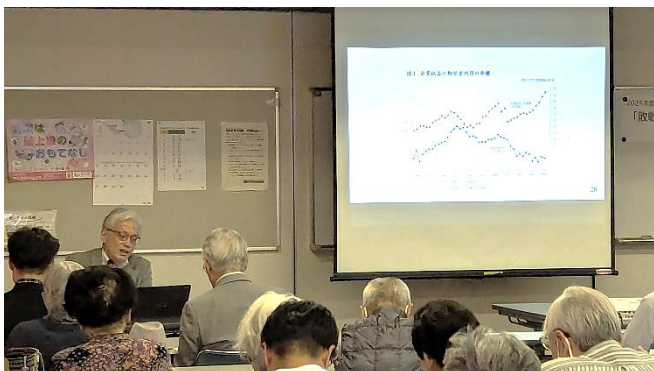
かぎ じ かん みの おお き ねん
限られた時間ではありますが、実り多い記念
こうえんかい
講演会になりますことを願い、開会にあたっての
しゅさいしゃ
主催者のごあいさつといたします。
ねん がつ にち
2025年4月26日

はいせん ねん に ほん すす ほうこう かんが 敗戦80年 日本の進むべき方向を考える

やまぐち じ ろう
山口二郎さん(法政大学法学部教授)

みなさん、こんにちは。れんきゅう ど よう び
連休がはじまった土曜
で、天気も良いなか大勢集まっていたで大変
うれしく思います。冒頭のあいさつにもありましたが、今年はいせん
が、今年はいせんから 80年という節目、かつ、日本
のみならず、世界各国で歴史と伝統を持つ民主
主義の国で民主主義が相当危くなっているとい
う現状があります。

今日の話は、なぜ戦後80年の節目で民主政
治がおかしくなったのかという背景を説明するとい
うこと、この後、民主主義を回復するためにどう
するかというお話ができればと思います。しかし、
これは簡単な答えはないわけです。わたしたちは
これから悩み、苦しみ続けていかなければいけま
せん。



1. 多くのデモクラシーは戦後デモクラシー

①市民権と戦争

まず、戦後デモクラシーという話をしたいと
思います。多くのデモクラシーは戦後デモクラシー

でした。一つは、人びとが戦争で国に貢献したら、
それに対して報いるということで、政治参加の機
会を従来政治から排除されていた、いわゆる平
民という大衆というか、あるいは女性に開放す
るという歴史的なメカニズムがありました。詳細は
省きますが、たとえば女性参政権がなぜアメリカ、
イギリスなどから始まったかという、第1次世界
大戦で女性が戦争に貢献した、これは大きな引き
金だったわけです。あるいは、いわゆる福祉国家、
国民皆保険や公衆衛生など、福祉国家というの
は総力戦をすすめるうえで必要だった。国民みん
なを兵隊にして戦争を戦うには、社会保障も公
衆衛生も必要だという事情があった。だから、非
常に不幸な歴史だけれど、戦争が民主化をすす
めたという面は否定できません。しかし、20世紀
に入ってから、戦争を反省することから民主主
義が広がったということをまず確認しておきたいと
思います。

②第1次世界大戦の戦後民主主義

第1次世界大戦は、人類史上最初の総力戦、
全体戦でした。特にヨーロッパでは本当に大きな
破壊と犠牲がありました。その後、アメリカの大統
領ウッドロウ・ウィルソンが14カ条という戦後世
界の原則についての提案をしました。そのなかで
国際協調、民族自決、あるいは国際法の普遍主
義を協調しました。各国で第1次世界大戦後、普

通選挙制、あるいは女性参政権が実現した。日本の大正デモクラシーもその一環でした。第1次世界大戦末期にロシアで革命が起き、他の国にも大きな影響を与え、労働組合や労働運動が高揚する、あるいは社会主義の理想を追求する、いわゆる左翼政党が拡張していききました。イギリスのように、左派政党が議会政治のなかで改革・改良を求めていく国もありましたし、革命運動を追求する、ある種、過激な左派がいたという国もあったわけです。

○脆弱な資本主義と民主主義

残念なことに、第1次世界大戦後の戦後民主主義は、1920年代から30年代にかけて崩壊していきま。ドイツでは敗戦のトラウマからナショナリズムが高まり、ヒトラーが出てくる。1929年から始まった世界大恐慌で経済的な混乱のなかで、人びとは民主主義を支持するという常識を失っていく。あるいは、社会主義政党が力を持って政党政治が分極化するみたいな現象がありました。

○大衆社会と政治の不安定化

第1次世界大戦後の民主政治の危機現象をもたらした要因は、100年たった今と重なる部分があるので、少し説明します。普通選挙制を実施して大丈夫かという危惧・不安を持つ人はいました。19世紀までの政治は選挙に参加できる人が限定されていました。たとえば、一定の所得がある人、日本でも税金を納める金額が一定以上の人、女性性はダメなどの制約がありました。普通選挙制になったらみんな投票に行く。みんながちゃんと考えて投票できるかという問いは、大昔からあった問いですが、20世紀の世界で現実の問題になりました。

他方で、新聞、ラジオ、映画というマスコミュニケーションが20世紀には発達します。そういう

状況のなかで、アメリカのジャーナリスト、ウォルター・リップマンが、『世論』（1922年、原題：Public Opinion）という本を書き、いわゆる大衆社会、つまり普通の人と同じように参政権、投票権を持ち民主政治を担う時代の危うさを予言していました。その本のなかで出てくる一番重要な概念が、ステレオタイプという言葉です。日本語でいうと、固定観念です。たとえば、大阪の人はとても明るくて、おせっかいだというイメージが東京の方ではあります。大阪の女性は、ヒョウ柄のシャツを着ているとかです。そういうのはステレオタイプです。つまり、全然事実には照らして、根拠がないけれど、みんながそういうものだと思い込んでいるイメージ、これがステレオタイプです。「大阪の女性は、こうこうだ」みたいなステレオタイプはまだ無害ですが、たとえば、特定の国の人びとはとても好戦的で攻撃的だとか、特定の民族はとてもお金にきたなくてケチだとか、そういうステレオタイプが流布されるようになると、これは政治的に非常に悪影響を及ぼします。もっと言うと、戦争をすすめたい指導者は、敵国に対して悪いステレオタイプをふり撒いて、「だから我々はこれと対決をしなければいけないんだ」みたいなかたちで、政治的に利用するということがあります。そこをリップマンは問題にしたわけです。つまり、民主政治が陥る問題点はすでに100年前から見えていたということです。

もう一つ、スペインの哲学者ホセ・オルテガ・イ・ガセットという人が、『大衆の反逆』（1930年）という本も書いています。大衆社会、普通の人々が平等に権利を持って政治に参加することの危うさを指摘しました。オルテガは、19世紀までのある種のエリート支配が崩壊したことを嘆いている、ちょっと保守的な人なので若い頃のわたしは、こういう議論は好きじゃなかった。いまは、結構おもしろいなと思います。大衆という人間像をオルテガは、「慢心した坊ちゃん」と表現します。

「慢心した坊ちゃん」は、自分でしたい放題のことをするために生まれ落ちた人間。家族のなかではひどい罪を含めて何もかもが結局は無罪となる。「慢心した坊ちゃん」は、家の外でも家のなかと同じように行動できると信じている人間であり、取り消しが効かないものは何一つないと信じている。

オルテガは、自分勝手に欲望追求に対する自制心がない人間が社会にあふれてくることの危険性を指摘しました。みなさん、この部分を読むと、何か思い当たることがないですか？たとえば、トランプは、まさにオルテガがここで言っている「慢心した坊ちゃん」そのものじゃないか。あるいは、安倍政権。いまから 6、7年前に、安倍はオルテガのいう甘やかされた子どもだとわたしは書いて、ずいぶん批判したことがあります。つまり、エゴが肥大、利己主義がどんどん膨張し、ブレーキが効かないような人物が社会を動かしていくということが、20世紀以降のいわゆる大衆民主主義のなかで可能になるということをオルテガは警告したわけですね。実際、1930年代以降になると、イタリアのファシズム、ドイツのナチズム、日本の軍国主義でファシズムが台頭し、世界戦争に至ります。

この民主政治崩壊の基本的パターンは、100年近く経ったいまと重なる部分があるので、確認しておきます。

③ファシズムと世界戦争という破局

○民主政治崩壊の基本的パターン

***政治的要因：政党政治の分極化と統治能力の喪失／国家統合への欲求と指導者待望論**

政党政治がバラバラになり、その統治能力、要するに国を治める政策を決定する力が消えていく。いまの日本も、衆議院で与党が過半数割れする状態ですが、そういう感じです。フランスもいまそ

うです。そういうかたちで政治が停滞すると、やっぱり国をまとめていくには強いリーダーが必要だという、指導者待望論が出てくる。

***経済的要因：世界恐慌の衝撃と失業、インフレ**

世界恐慌の影響で失業が広がり、インフレがひどい。経済的な混乱はもちろん民主主義を脅かします。

***社会的要因：中間層の陥没と帰属欲求**

中間層が陥没をしていく。特にドイツの場合です。雇用が不安定になり、経済的にも非常に困難になり、生活が苦しい、中間層が没落をする。そうすると、どこかに所属して安心させてもらいたいという欲望が強まります。

***ファシズムの精神構造：サディズムとマゾヒズムの交錯（エーリッヒ・フロム『自由からの逃走』）**

ナチズムを分析した社会心理学者エーリッヒ・フロムの『自由からの逃走』（1941年）という本には、サディズムとマゾヒズムの交錯という話があります。これもいまと重なる感じがします。つまり、強いリーダーを求めるという心理は、マゾヒズムです。つまり強いリーダーに統治してもらいたい、支配してもらいたい。他方でサディズムは、自分より弱いものに対して、鬱憤をはらす、いじめたい、差別してやりたいとか、そういう欲望も併存しているわけです。だから、ヒトラーに抑圧されるドイツ人は、ユダヤ人に対して、いじめとか差別とか、最後はホロコーストまでいったわけですが、そういう人間の邪悪な感情を向けました。これもいまの、たとえば、アメリカにおける少数派とか外国から来た人々に対する過酷な排斥をみていると、いまに重なるなという感じがするわけです。

○ファシズムの政治手法

暴力の日常化と恐怖の蔓延、暴力の日常化で

もって人びとを恐怖に 陥 れるということです。ナチスは、軍隊、警察以外に突撃隊や親衛隊という暴力集団をつくり、人びとに対して暴力を向けたわけです。

それから、人種主義と差別の扇動です。ユダヤ人の話などがそうですね。指導者を崇拜する。いま、『ゲッベルス ヒトラーをプロデュースした男』という映画を日本でも公開しています。ゲッベルスは、ヒトラーの最大の側近で、ナチズムのプロパガンダ、広告を担った人物です。これは大変おもしろい映画でした。

ステレオタイプと虚偽の流布は、さきほど言ったステレオタイプを駆使して、人を差別する、敵国を憎悪するという民衆の感情を動員していきます。嘘っぱちでも、デタラメでも、どんどんそういう話を氾濫させ、ステレオタイプを人びとに埋め込み、戦争や差別という方向に大衆を仕向ける、こういう手法です。つまり、20世紀前半のデモクラシーは、ある意味、理想を追求したものではあったけれども社会的・経済的条件が整っていなかった。結果的には、独裁や戦争の方向に向けて、独裁者によって操作されたという大変苦い歴史があるということです。

2. 第2次世界大戦後の戦後民主主義

① 先進国におけるさまざまなパターン

i. アメリカ

*ニューディール体制と豊かさによる国民統合

第2次世界大戦後の戦後民主主義はどのようなものか。第2次世界大戦を反省して、それぞれ国によってかたちが違いますが、戦後民主主義が構築されました。アメリカは戦争に勝った国です。第2次世界大戦は、民主主義とファシズムの戦いで民主主義が勝ったという大きな物語が戦後の世界を支えました。国際連合も勝った国が主導してつくった国際的な枠組みです。アメリカはまさに民主主義の盟主、旗頭として戦後世界のリーダ

ーになりました。国内的には、世界大恐慌の後のニューディールと呼ばれる政策を全面的に継続します。完全雇用を目指して公共事業などを行い、政府が積極的に社会政策・社会保障などを行うという政策のかたちが一般化します。

*戦時の遺産が戦後に引き継がれる 大量生産大量消費

特にアメリカは、大量生産大量消費の戦後の資本主義の発展の牽引者になっていきました。戦争中の巨大な生産システムが戦後も続き、軍事物資をつくる代わりに戦後は自動車、家庭製品をつくり、大量生産大量消費の社会をつくりました。

*民主主義の一層の普遍化＝多様性の尊重と市民権の拡大

民主主義の理念が一層普遍化していきました。もともとアメリカの民主主義は白人の男性の民主主義でしたが、女性も、さらに後には黒人などのマイノリティーにも民主主義のなかに統合されるというかたちで、戦後民主主義が広がります。ヨーロッパもそれぞれでいろんなかたちがありましたが、戦後民主主義をつくったわけです。

ii. 西欧

イギリスでは、ゆりかごから墓場までという福祉国家をつくる。第2次世界大戦でドイツが負けたすぐ後に、戦後最初の総選挙をして、チャーチルという戦争の英雄が率いる保守党が、なぜか選挙で負け、労働党が勝ち福祉国家をつくりました。以来、二大政党制と政権交代という政党政治のモデルが戦後ずっと続いてきました。それがイギリスの戦後民主主義です。

フランスは混乱がありましたが植民地をどんどん手放していきました。民族自決を認めていく。もう一つ、フランスはEUをつくるという点で大きな貢献をし、ヨーロッパを不戦の共同体にするとい

う努力をしたということは大きな意味があります。
ドイツは日本と同じ敗戦国でナチズムを徹底的に否定する。戦後のボン基本法という民主主義の憲法を礎にして民主主義の国をつくりました。民主主義の憲法をみんなで大事にする、憲法愛国主義という考え方で、戦後民主主義を担いました。ドイツも日本と同じように、軍事に関しては、対外的には消極姿勢をとることで平和に貢献します。そして産業の再建、経済発展をしながら、ドイツも福祉国家をつくっていきました。

○日本の戦後民主主義

*天皇制の継続と戦後政治体制をめぐる正統性の不安定

復古主義的右派 マルクス主義左派
日本の戦後民主主義はどうかというと、敗戦の後に自動的に戦後民主主義が始まったわけではありません。ご承知のように、占領軍主導で新憲法を制定する。これをどう受け止めるかという点に関して、国内的にはいろんな対立がありました。戦争が正しかったと言いたがる復古主義的な右派、ナショナリストというのは、やはり右側あるいは保守の側には結構いました。左翼の方ではマルクス主義の影響が結構強く、欧米流の民主主義の枠にとどまらず、革命を目指すような勢力もいました。

*憲法第9条と平和国家というアイデンティティ

もう一つ、敗戦の経験は圧倒的に国民に共有されていて、憲法第9条と平和国家というアイデンティティは守られ、広く共有されていました。さすがに保守というか、後の自民党といえども、ここを変えるということはできなかった。

*60年安保と戦後政治体制の定着

戦後の80年をふりかえると1960年はとても大きな転機だったと思います。つまり、45~60年

はまだ戦後体制の揺籃期で、戦後デモクラシーが十分に定着したとはいえなかったと思っています。岸信介という安倍晋三の祖父が、まさに復古主義的な考えて憲法改正を唱え、安保条約改定をステップにさらに彼の考える改憲、あるいは戦前日本への回帰みたいなことを目指した。これに対して、人びとは、安保反対運動に立ち上がり、国会を取り巻いた。大きなデモが連日続いたわけです。その帰結として、安保条約は自民党の賛成多数で認められましたが、岸は市民のデモの圧力の前に退陣を余儀なくされた。その後、自民党もモデルチェンジしたわけです。池田勇人が総理大臣になり、岸路線を否定した。憲法改正には手をつけない。憲法第9条と自衛隊の関係については、いろいろと論争がありましたが、自民党といえども、憲法第9条には手をつけない。日本の自衛隊は専ら自国を防衛するための自衛力であり、他の国の脅威にはならないという理屈で、自衛隊を正当化した。それは憲法を純粋に守る立場から見れば詭弁ですが、それなりに意味がある話で、ある意味の平和国家路線を、60年代から90年代ぐらいの自民党政権は追求したわけです。

○幸福な時代と犠牲の押し付け

*経済発展と全般的な幸福

戦後民主主義の時代に生まれ育ったわたしなんかの世代は、基本的には良い時代に生きてきたと思います。もちろん世の中には、いろんな問題や不幸があって、国民みんなが幸せだったわけではありませんが、いまと比べると、良い時代に育ったと思います。何か将来、希望が持てるというか、全体的に経済成長しながら社会が拡大してき、意欲と能力に応じて人生の進路を自分で選ぶことができた多くの人にとって、そういう自由があった時代だと思っています。

わたしは、小学校の教師の息子で、家はそんなに豊かではありませんでした。大学までいき、好

きな勉強をして、学者の道にすすんだ。それは、個人的な経験だけではなく、戦後の日本が 50年代から 70年代、80年代くらいまで、全体として生活水準が上がり、ある種、安定した豊かな生活を送ることができた時代だったからだと思います。

***周辺に対する犠牲の押し付け 水俣 沖縄 福島…**
他方でももちろん、影の面もあったことは否定できません。高度成長の影の公害問題で、水俣病などいろいろな問題がありました。あるいは、日米安保のなかで、日本は国際的な問題についてはあまり考える必要はない、アメリカに任せっきりという幸運な環境にいた。ただ、沖縄には米軍基地をいっぱい置き、沖縄の人びとに負担を一方的に押し付けるということをしていた。3.11 の後は、福島に原発を置き、首都圏のエネルギーを供給していたという仕組みの歪みが現れた。部分的に犠牲を押し付けるということがあった。これは繁栄を享受していた我々も忘れてはならないことであるし、その償いはこれからやらなければならないと思います。

***エリートの無責任:戦前と戦後の連続性**
もう一つ、繁栄でもって、みんな幸福感に浸ったとはいうものの、戦前と戦後の連続性という問題も認識しなければならないと思います。いまの水俣や福島の問題に現れているわけですが、政策決定者、政治家や官僚の無責任というのは、ほんとう せんぜん せんご きょうつう れんぞく 本 当 に 戦 前 と 戦 後 で 共 通 し て い る、連 続 し て い る と 感 じ ま す。つまり、何が無責任かというと、自分たちにとってうれしくない、不愉快な現実を直視できない。都合のいい情報だけ入れて、希望的な観測に基づいて政策をつくるようなところなんです。これは、高度成長のときはまだそんなに問題にならなかった。けれども、たとえばバブルが崩壊し、不良債権問題が深刻になってきたというときに、失敗を直視できない。多分こうやったらうまくいくだろうとい

う机上の空論で対策を立てた気になり、時間を無駄にして、ますます問題が悪化して、大きな犠牲を払うということになる。あるいは、原発事故もそうです。地震・津波が起きたら危ないということを警告する科学者はいた。しかし、そういうことは起きないだろうということにして対策を怠り、実際に大きな津波が起きて、メルトダウンという話になりました。そういう意味で、エリートの無責任さというのはずっと続いているということが、特に下り坂になったこの 20年、30年、日本にいろいろな害悪を及ぼしてきたということをわたしたちは認識しなければなりません。それはいまの行き詰まりを打開する鍵になるだろうと思います。

② 戦後民主主義を支えた前提条件

i 歴史意識と記憶

*戦争への反省と民主主義へのコミットメント

戦後民主主義を支えた基本的な条件をふりかえって整理したいと思います。1 つは、歴史意識と記憶だと思います。特に日本やドイツのような敗戦国の場合、戦争は大変悲惨なものだったということに大きな合意があります。戦争は二度としてはいけない、そういう意味での平和主義です。人間を大事にしなければならない、人間は国家のための捨て駒じゃないんだというところから人権や民主主義を考える対応、これは戦争の記憶、戦争の経験を土台にしたものだろうと思います。

*民主主義がファシズムを倒したという大きな物語

世界的には民主主義がファシズムを倒したという大きな物語のうえに戦後の世界ができたわけです。国際社会においても普遍的なルールに向けた歩みがすすんだと言えます。

*国際社会における普遍的なルールへの歩み

脱植民地化と民族自決 人権擁護／大国のご都合主義の残存

第2次大戦後は、植民地がどんどん独立しました。アジア、アフリカなどで民族自決という原理で、それぞれの民族が自分の国を創るという大きな変化が起きました。これはデモクラシーの理念が地球規模に広がり、アジア、アフリカの人びとがいギリス、フランス、アメリカといった帝国主義的な大国の支配を受けるのはおかしいではないか、自分たち自身で自分たちの国を創りたいという当然の要求を持ったことで起きた変化です。もちろんアメリカであれ、イギリスであれ、あるいは昔のソ連であれ、大国のご都合主義というものは、ベトナム戦争や最近でいえばアフガンとかイラクとかといった戦争につながっていったわけです。けれども、民族自決や主権国家の対等性、あるいは武力によって他国を侵略してはいけない、そういったルールは、例外や大国によるねじ曲げはあったものの、世界でそれなりに根を下ろした考え方になったと思います。

ii 啓蒙の遺産

二つ目の前提、これは啓蒙の遺産とでも申しましょうか。人間は物事を合理的に考えると、嘘や偽りを言うてはいけません。少なくとも、世の中のことを考えるときには、事実に基づいて、論理的にもものを考えて、合理的な政策を選ばなければいけないという建前がありました。もちろんその通りいかない話はいっぱいあります。非合理的に政策を決めたとか、感情でもって政治が動かされたとか、そういう例は山ほどあります。しかし、戦後民主主義のなかでは、日本でもあるいは欧米でも、啓蒙の遺産がまだあったと思います。

啓蒙は18世紀、19世紀、ヨーロッパから始まって民主主義と共に、人びとを教え導いたものの考え方です。啓蒙の反対は野蛮や未開などです。つまり、社会には身分差別があるのが当たり前とか、国は世襲の王様が支配するのが当たり前など、当たり前をそのまま信じ込むのが未開であり

野蛮です。啓蒙は、それは違うということです。社会には差別があってはいけない、人間は平等で、みんな基本的な人権を持っているんだという考え方です。これはいろんな源があります。わたしたちが高校で習った、ルソーやロック、カントなどいろんな思想的な源があります。けれども、やはり根拠のない当たり前を疑うというのが啓蒙です。そして、人間の合意によって、みんなが納得できる、みんなが幸せになれるルールをこの世の中でつくっていくべきだというのが啓蒙の考え方です。

啓蒙は、20世紀にだいぶ定着をしてきました。2回世界戦争をして人間はだいぶ反省し、他国の国民を憎悪して武力で殺し合いをするなんてやっぱり野蛮の限りだと。これからはお互いを認めあい共存していこうという考え方を共有するようになりました。

*中等、高等教育の普及

日本でも先進国でも教育が普及していきました。特に中等教育、高等教育が普及しました。世の中のルールはこういうものだ、あるいは人間というのは基本的な人権を持っている、平等なんだというような建前を一通り習うわけです。それは正しいものだとして受け入れるわけです。

*テレビの定着、新聞の黄金時代

日々の政治との関わり方でいえば、テレビが20世紀後半に普及します。新聞は20世紀後半に黄金時代を迎えました。こういう伝統的なメディアを通して人びとは世の中に関する情報を得て、自分なりにものを考えて選挙のときに投票する。あるいはいろんな問題に対して意見を表明して世論もつくっていくという民主主義のモデルができるわけです。啓蒙のなかでは先生と生徒という関係性がどうしても否定できないわけで、わたしたちのような学者は世の中に対して教える側です。民主主義はこういうものだ、いまの政治は

民主主義の利益に照らしてこういう問題があると指摘する。その意味で権威があります。昔に比べれば教師の権威は小さくなりましたけれど。

*権威と自由のバランス

人びとの方はもちろん自由にものを考えるけれども、世の中の仕組みを知り、情報、事実を掘り起こし、みんなに共有していくという意味で言えば、ある種の権威を認めることも必要です。新聞で書いてあることは事実だし、それを共有した方がいいということなどです。そういうような権威と自由のバランスが 20 世紀の後半にはあったと思います。だから立派な学者が市民向けの本を書いたら何万部も売れるというような時代でした。

*民主主義における市民と受動的消費者

政治が安定した時代の市民はある意味、受動的な消費者というか、直接的な運動をやったかより一定の範囲内で政治にも関与するけれども、いろんな専門家を信頼しながら政治を任す。必要となときに意思表示・意見表明をするというくらいのバランスがあったという感じがします。

*政治家の質の担保 知的水準 人権意識

啓蒙が生きている時代には政治家の質も担保されていました。政治家はちゃんと物を知っているわけです。人権意識もなければならぬ。要するに人間の平等性や個人の尊厳、そういう根本的な価値を否定するような人は、政治をするべきではないというような常識があった。嘘をつくとか、インチキをするとか、権力を私物化して私利私欲を図るとかそういうことをやる人間に政治家の資格はないんだということで、政治家の質をコントロールするという民意がありました。

iii 豊かさの共有

*第二次世界大戦後の経済成長

それから戦後デモクラシーの前提、経済的な面でみると豊かさの共有がありました。第2次世界大戦後は、世界的に経済成長を続けた時代でいろんな分野でイノベーション、新しい発見による技術革新がすすみました。

*さまざまな分野における技術革新と価格低下

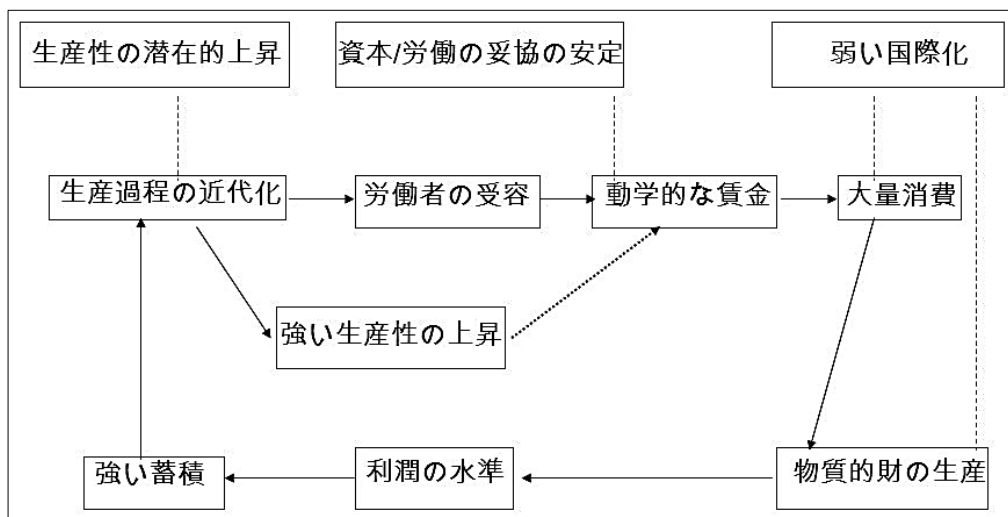
自動車も家電製品もどんどんイノベーションにより質は良くなる。けれど値段が下がりました。パソコンもそうですね、昔は何十万円もしたようなものがいま、数万から十万円ちょっとくらいで手に入ります。大事なことは経済成長の富が比較的平等に分配されるメカニズムが存在していたということです。

*フォードイズムの分配の好循環

これは経済学では、フォードイズムと言います。フォードイズムのフォードは、アメリカの自動車会社です。フォードは、ベルトコンベアーによる流れ作業方式を最初に導入しました。それで自動車の生産効率が大幅にアップし、フォードは自動車の値段をうんと下げました。そうすると自動車の需要が爆発的に増え、大儲けしました。ただ大儲けした富を資本家、経営者だけが独り占めするのではなくボーナスや賃上げで労働者に還元しました。そこにフォードイズムの特徴がありました。これは専門的な学者のつくった図式です(図1)。

大事なのは、生産過程が近代化、イノベーションが起こると賃金が上がっていく。だから一生懸命働いて能率をあげる。それにより賃上げ、給料が増えたら自分も大量消費をする。それで需要が増える。このイノベーション、能率アップ、賃上げで大量消費、またさらに生産能力を増やすための設備投資という好循環がありました。これが 20 世紀後半の豊かさの特徴なです。

図表1 フォーディズムの蓄積体制



*中間層の形成と階級対立の緩和／政治意識の穏健化

そうすると中間層が形成されていきます。マルクスが考えたような階級対立は緩和してきます。みんなそれなりに既得権、一定の生活を確保してそんなに革命なんか起こさなくてもいいというような穏健な政治意識になっていくわけです。

iv 社会の同質性

*西欧における人種、宗教の同質性／脱植民地化と同化政策

20世紀の後半はまだそんなに人間の移動が盛んではない時代でした。西ヨーロッパの国は、基本的には、白人のキリスト教徒の国だったわけです。ドイツが経済成長のなかで労働力不足にあえいで、トルコから移民を受け入れることはありましたが、基本「人種」や宗教など同じような人たちが集まっていた。植民地を解放し、イギリスやフランスに旧植民地から「人種」のちがう人たちがも入ってきたけれど、これはとりあえず同化政策で国民に統合してきました。それが可能でした。

*国民国家と民主主義の重合／国境を越えた移動は例外的

国民国家、一つの民族が一つの国をつくるとい

う国の姿を単位にして民主主義が成り立っていた時代だといえます。国境を越えた移動はそんなに頻繁ではありませんでした。アメリカは移民を受け入れていたのでちょっとちがいますが、社会が同質的であったということです。

3. 戦後民主主義の動揺

①ケインズ主義的福祉国家の終わり

そういう意味での戦後民主主義がいつ頃からようすがおかしくなってきたかということ、70年代末から80年代にかけてです。いろいろと民主主義を支えた前提条件が崩れ始めました。経済面では、政府が公共的支出を行い、公共事業をし、雇用をつくり、完全雇用とある種の平等をつくるみたいな福祉国家路線が70年代からだんだん難しくなってきました。細かい話はもうスキップしますが、石油ショックが70年代に2回起き、高度成長が止まり、スタグフレーション、不況、インフレの時代になりました。そういう時代のなかで労働運動は一部過激化しました。イギリスの炭鉱夫やアメリカの空港の管制官の組合などがストライキをしましたが結局鎮圧され、労働運動もおとなしくなりました。そうして先ほど紹介したフォーディズムの好循環が止まるわけです。

○小さな政府の時代

小さな政府の時代が 1980年代からどんどん広がります。小さな政府というのは、規制緩和、民営化、減税を政策の柱にしています。わかりやすく言うと、金儲けを全面的に正当化する。金儲けは善である。金儲けのための邪魔をどんどんどかしていくというのが小さな政府の意味です。そうなると、金儲けをしたい経営者は、たとえば人件費が高いところだと、儲けが少なくなるから人件費の安い国に生産拠点を動かすという話になる。だからアメリカで言えば、アメリカ国内のペンシルベニアやミシガンはラストベルト、錆びた地帯と呼ばれる。そこから、メキシコ、さらには他の国に工場を移すという話になる。日本で言えば、80年代以降、韓国、東南アジア、そして中国にどんどん拠点を移していくという話になっていく。これは雇用を不安定にするわけです。

それから小さな政府で、どんどん歳出を切り詰める、社会保障を中心とした支出を削減していくと貧困格差問題が深刻になっていくというわけです。規制緩和は雇用にも及びます。いわゆる正規雇用・正社員を減らしながら、どんどん非正規を増やしていく。これも格差貧困の原因になるわけです。

③ 文化的変容

文化的変容、これはアメリカなんかが一番典型です。1960年代は、いわゆるカウンターカルチャーが広がります。ベトナム反戦運動や大学紛争など、若者が反乱を起こすわけです。そのなかでおとなたちの欺瞞を追求する。少数者の尊重、あるいは女性の権利を認めろというような主張をしていく。繁栄の影にあった格差や抑圧を争点化するというのはカウンターカルチャーのテーマでした。それはもちろん必要なことです。たとえば 60年代、アメリカでは公民権運動があり、やっと黒人も平等な市民としての権利を得るようになりました。そ

れは良いことですが、他方でさっき啓蒙の時代にあった自由と権威のバランス、これが崩れてくるという面もあります。

権威を否定するのは、必要な面があると思います。大したことはないのに、教師というだけで威張るという権威主義は良くないとは思いますが、啓蒙のなかで普通の人びとに対して、物の考え方や知識はこういうものですよという導きをする

こと自体を全部否定するかたちで権威を全部壊しちゃうと、これはちょっとちがう話になります。少数者の権利を守るのは必要ですが、アメリカあるいは一部のヨーロッパなどで、いわゆるアイデンティティ政治と呼ばれる政治の闘い方。つまり、少数者の権利を絶対的に主張し、そこで従来の権利を認めてこなかったものを厳しく弾劾・断罪するところで、摩擦や対立が起きてくるとい

問題です。建前に抑圧されてきた本音を吐き出したいと思う人が増えるという問題があります。

○普遍的原理の拡大 アメリカ独立宣言から始まった幸福追求権

We hold these truths to be self-evident, that all men are created equal, that they are endowed by their Creator with certain unalienable Rights, that among these are life, liberty and the pursuit of happiness.

アメリカ独立宣言 1776.7.4

たとえば、アメリカにおける権利の拡大ということを考えて、これは必然的なものだし、正しい歴史があるわけです。ここでアメリカの独立宣言(英文)を引用しています。日本語に訳すと、『われわれは以下の真理を自明のものと考える。すべての人間は神によって平等につくられ、奪うことのできない権利を付与されている。その中には生命・自由・そして幸福の追求の権利がある』これ

は日本国憲法にも取り入れられている考え方です。

○Men の意味を広げる努力

この、All men are created の men という言葉に注目する必要があります。アメリカ建国、1776年段階では、men は、白人の男性だけでした。しかし、その後、女性も黒人も、自分たちは men の一員だ、人間だと主張し、闘った。これは正しいことです。男性も含めて、そうだなと納得して、女性参政権を認め、公民権を認めるという大きな流れがありました。この歩みは、逆転させることはできないものです。しかし、他方、建前と本音の微妙なバランスという問題があります。男性のなかには、men は男性だ。女性だの黒人だのが後から権利を主張し、一人前の顔をするのはおもしろくないと考える人も、実際にはいました。いまでもいるわけです。その緊張関係が、世の中でだんだん顕在化してくる問題があります。いまと関連づけて言えば、そういう本音でもって権利の平等を嫌だなどと思う人間を、むしろまいこと取り込んで、政治的なエネルギーにする困ったリーダーも出てきました。

③社会の多様化

社会が多様化する、人間の移動が活発になる、特にアメリカ、ヨーロッパでは移民が増加してくる、「人種」や宗教が多様化する。つまり、ヨーロッパでもアフリカや中東から人がやってきて、イスラム教徒もいっぱいいる。そこで文化的な摩擦が起きます。一方で、先ほどから言っている、建前を尊重するならば、多様性が大事だとなるけれども、昔のような非常に均質的な、みんな似たりよったりの同じ宗教や同じ言語や同じ「人種」の人で世の中を構成する方が、摩擦がなくてよかったというように考える人もいます。そこで対立が起きます。どこまで多様性とか寛容というものを実践するのか、

ヨーロッパやアメリカが持つべき基本的な価値は何なのかをめぐり、対立が起きるという話になります。

④ 政党の空洞化

政治の世界ではどうかと言うと、政党政治は20世紀の後半、1960年代ぐらいが黄金時代だったのかなと思います。人びとは、自分はこの党の支持者だみたいな同一感やアイデンティフィケーションを持っていました。選挙のときには投票に行き、投票率が80%、70%ぐらいだった。基本、豊かな社会で政党はわりと穏健な政策を掲げながら、そんなに大きな食いちがいもなく、政治を運営してきた時代があったわけです。けれども、だんだん経済的な前提が崩れ、いろんな人びとをまんなく喜ばすような経済政策をとることが難しくなっています。既成政党が、どれもこれも似たりよったりでおもしろくないという状況になると、一つの争点を掲げる政党が登場してきます。そういうのをシングルイシュー、単一争点政党といいます。環境保護みたいな単一争点は良いですね。だけど、やっぱりそこでもって移民排斥や人をいじめたい、差別したいみたいな感情に訴えるような単一争点政党も出てきます。ポピュリスト、つまり、大衆のそういう感情を刺激して支持を集めようとするような、山師みたいな政治家も登場してきます。他方で、人びとは代理制民主主義みたいなものに対して、だんだん諦めを持つようになり、政治的無関心も広がる。選挙において、投票行動の触れ幅が大きくなるという現象が、いろんな国で共通していくことになるわけです。

⑤ 歴史意識の変化

非常に大きいものとして、歴史意識の変化があります。戦争が終わり30年、40年、50年と時間が経つにつれ、当然ながら戦争を直接知った人はいなくなります。世代を超えて戦争責任を継承

することは本当に難しいと思います。たとえば、日本で戦後50年、1995年を思い出してみます。95年は誰が総理大臣だったかという、村山富市でした。社会党の委員長です。その村山政権を支えたのは自民党でした。自民党と社会党は連立を組んでいたという時代です。

わたしはその頃からいろいろ政治に関わっています。あの頃の自民党の幹部たちは、戦争をくぐっているわけです。もちろん保守ですが戦争はしちやいけない、だから憲法第9条は大事だという人たちが多くいました。だから社会党とも手を組めたわけです。安倍晋三は、あの頃まだ当選1回の若手でした。だけど、戦後50年、そういう大きな合意のなかで戦争を反省する、あるいは戦後50年とし、わらやまだんわにほんのせいふとして出し、過去の罪についてちゃんと反省する、償いをするということがやれた。しかし、その後です。坂を転げ落ちるように歴史意識の風化がすすみました。たとえば、いわゆる歴史修正主義です。あの戦争を正当化したり、従軍慰安婦はいなかったなど、そういうたぐいの過去の自国の罪を否定、あるいは国の行動を正当化したりするような議論が広がり、そういう流れのなかで、安倍晋三という人が自民党の右派のリーダーになっていくということです。

日本の場合、バブルが終わり、どんどん経済的に停滞が続く、人口が減り出す、GDP世界第2位が3位になり4位になりというジリ貧状態。だからこそ過剰に自分たちを正当化する、虚勢を張るというか、そういうナショナリズムが広がっていくわけです。

4.21世紀における民主主義の動揺

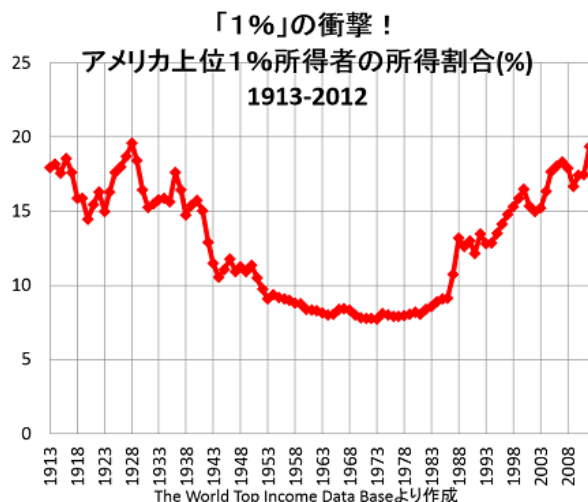
①グローバル化と資本主義の変容

21世紀における民主主義の現状はどうかという話をします。これはいま言った80年代以降のへんかえんちようせんじょうはなしけいざいぐろーばるか変化の延長線上の話です。経済のグローバル化、しほんしゅぎへんかいちだんしんこく資本主義の変化というのは、一段と深刻になり、

それが社会と民主政治を引き裂く、揺さぶっているわけです。とにかく貧困、格差の広がり、それから雇用の劣化、これが世の中をおかしくするわけです。

○アメリカにおける富の集中

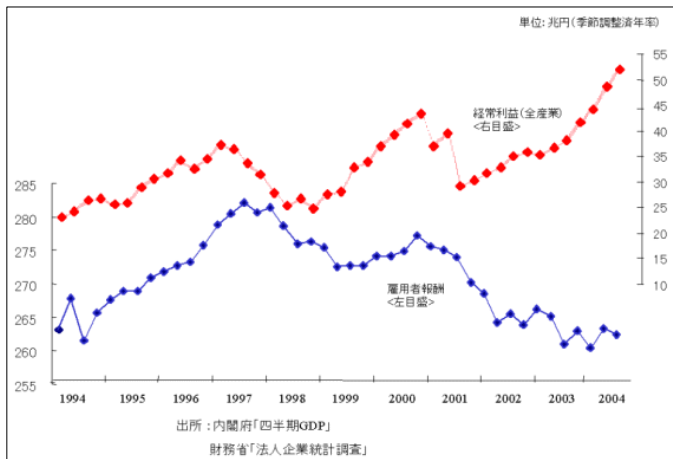
図表2



このグラフはアメリカにおけるトップ1%の金持ちが国民全体の所得のなかでどれくらいを取っているかというデータです（東洋経済オンライン2014.12.19）。第2次世界大戦の後、30年くらいは富の集中がすごく解消されます。トップ1%が国民全体の7、8%の所得を得ているだけです。ある程度平等に分配されたわけです。90年代くらいから急に富の集中がすすみます。

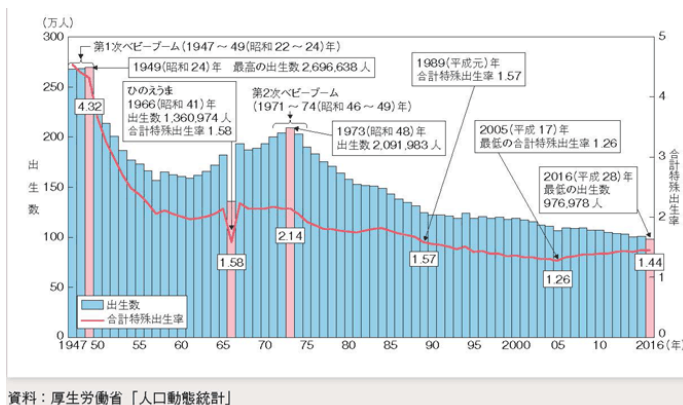
歴史のおさらいです。20世紀前半、1928年に富の集中がピークになり、その直後に世界大恐慌が起きます。2008年、また富の集中がピークになり、リーマンショックが起きます。つまり、富の集中が行き過ぎると、経済そのものがおかしくなるということを我々は2回も経験しています。また、性懲りもなく富の集中がすすんでいるわけです。これは、日本における企業の収益と、それから働く人の所得の変化を示したグラフです。

図表3 企業収益と勤労者所得の乖離



赤い折れ線が企業の収益、青い折れ線が働く人の報酬です。実額は、労働者の報酬の方が2百数十兆、企業の収益は40兆、50兆で実額は、労働者の報酬の方が多いんですが、大事なのは変化の傾向です。2000年あたりを境に、会社が儲かっても給料は下がる。その関係が逆転しています。20世紀は、会社が儲かったら給料が上がるというフォーディズムの時代でしたが、それがひっくり返った。会社が儲かっても給料が下がるというのは、不正確な言い方で、給料を下げるから会社が儲かるという時代になったというのが本当です。

○第3次ベビーブームは起きなかった



日本では、これが非常に社会にも悪影響を及ぼしました。これは毎年生まれる子どもの数、出生数です。敗戦直後にベビーブームがありました。1年に260万人くらい子どもが生まれた。その後、

ちょっと減りますが、ベビーブームで生まれた人が結婚して子どもをつくった70年代前半に、第2次ベビーブームが起きました。しかし、この第2次ベビーブームの人たちが、結婚・出産してほしいときに、全然子どもの数は増えていません。つまり、第3次ベビーブームは起きていないのです。なぜかといえば、経済的な理由です。給料が減っているから、雇用が劣化しているからです。この2000年頃は、就職氷河期、日本の金融危機、アジア通貨危機があり、採用が減りました。そこで、非正規雇用が増えました。いろんな意味で悪条件が重なり、若い人が安定した職につけない。その結果、結婚できない、故に子どももできないということで、人口の減少が加速されました。これが重要な変化です。

貧富の差が広がる、貧困が増える、低賃金労働が増える、それは日本の場合、人口減少に直結します。社会がどんどん収縮していくのは、人間の気持ちにすごくマイナスの影響を与えます。「恒産なくして恒心なし」という言葉が、大昔からありましたが、一定の豊かさや安定がないと、人びとは、世の中に向き合って落ち着いた気持ちで世の中を運営するということが難しくなります。

②ITとコミュニケーション革命

2つ目、情報革命という変化です。IT、さらにSNSがどんどん広がってくる。IT、インターネットができた当初、我々は、これは民主主義にとってプラスになると呑気なことを考えていました。しかし、それは外れました。いま、特にSNSで誰でも世の中に対して発信できる。そのこと自体は別に悪いことではありません。ただ、いまアテンションエコノミーといってX(旧Twitter)でもYouTubeでも、閲覧数を稼ぐとそれが儲かるような仕組みができています。そうすると、儲ける動機で、嘘や偽り、差別、中傷なんでもありみたいな状態がネット空間に発生しています。これが誠に困った話です。もう一つ言うと、SNSの発達は、

さっき言った啓蒙の時代を終わらせつつあるという
ことです。

SNSは、わたしはグーテンベルクの印刷術に
匹敵する 500年単位の大きな変化だと思ってい
ます。グーテンベルクの印刷は、ルターの宗教改
革と重なり、普通の人々が自分で聖書を読む、自分
で神様と向き合う、そして西洋近代を支えた
「個人」が生まれてくるというストーリーです。しか
しいま、SNSでみんながいろんな情報を手に入
れ、また自分の情報を発信する。他方、ルターの時
代とちがって、いまは、神様がいない時代です。ル
ターの時代に、みんなが自分で聖書を読んで神と
向き合うというのは万人祭司主義、一人ひとりが
キリスト教の牧師なんだみたいなとらえ方で、自
分でちゃんと信仰をつくっていかうと言っていた。し
かし、いまは神様がいない。みんなが神様になっ
て、自分の好きな説教を世の中に向けて、いっぱ
い垂れ流すみたいな状態になってしまいました。

世の中を理解し、世の中を論じるとき、いろんな
前提になる知識や情報、あるいは論理が必要で、
それには一定の訓練が本当は必要です。わたし
は、新聞、本、活字という伝統的なメディアで政治
を論じてきました。わたし自身は、ルターの時代の
プロテスタントのつもりで権力を批判してきました
が、いまの時代、わたしみたいに活字メディアを中
心に政治を論じるといって、小難しい言葉でわか
りにくいと思われるかもしれません。古い時代の人
間は、ルター時代のカトリックの坊さんみたいに多
分見えるんだろうなと思います。むしろ、いまは本
当に、嘘、偽りもごちゃ混ぜにして、あるいは人を
中傷し、差別するような言葉を盛り込んで、刺激
を与えるということがメディアで注目を集めるため
に必要だとかたちで、コミュニケーションが本
当に劣化しているという問題があります。

③ポピュリズムの広がり

これはこの間の兵庫県知事選挙でも、目の当

たりにした現象ですね。政治の世界では、そうい
う手法が大々的に展開され、ポピュリズムという手
法が広がりました。さっきも言いましたが、ポピュ
リズムは、民衆の感情を刺激し、既成政治の打破を
訴えるという方法です。経済は不平等化し、富が
偏る、貧困が広がる、社会は停滞し、人口が減り
出す、あるいはいろんな異質な人たちが社会に共
存して、摩擦が起きるとか、いろんな問題がある。
時代が閉塞しているように見えるんだけど、ポピュ
リストは、時代閉塞の理由を単純化する。あいつ
が悪いとかたちで、悪者を一つ見つけて、そい
つを叩く。要するに、「移民のせいだ」とか。あるい
は、維新の時代の大阪は「公務員のせいだ」とか、
そういう一つの要因で、世の中のいろんな問題、
悪を説明しちゃう。あいつをやっつければ、よくなる
んだと。だから、悪者に向ける一般庶民の、善男善
女の怒りや、あるいは欲求不満や、あるいは憎悪
をエネルギーする。これがポピュリストの方法です。

○民主主義とポピュリズムの微妙な関係

もう一つ言うと、民意を絶対化する、「俺は選挙
で勝ったんだ。だから俺のやることは国民が求め
ていることだ。邪魔するな」みたいなことです。これ
は、維新の手法ですね。「選挙で勝ったんだ」と。
トランプもそうですね。そうすると、権力分立とい
うのは崩壊するわけです。権力分立や立憲主義と
いう考え方は、選挙で勝った、あるいは選挙で表
明された多数者の意思といえども、間違えることが
ある。だから、多数者の意思のうえに憲法というよ
り普遍的なルール、規範を置いて、それに照らして、
その枠内で多数者の意思を実現していくようにし
ていかうと考え方です。しかしポピュリストは、多
数者によって選ばれた権力者のうえにルールはも
うない。多数者がすべてとかたちであらゆるこ
とを正当化する。だからいまのアメリカでも、市民
権を持っている外国人を無理やり追放して、エル
サルバドルに追いやってなどしている。裁判所が

それダメだと言っても、裁判所の命令を無視する。
これが法の超越ということです。

日本でもそういうことが起こりましたね。安倍政権の時、集団的自衛権を認めるとか、憲法解釈を内閣で持ってねじまげるようなことを平気でやりました。民意を絶対化するの、一見民主主義のように見えますが、一見民主主義と立憲民主主義はちがいます。絶対化した民意は、自らを食い潰すというか、民主主義が自らを食い潰すという問題が起きてきます。ただ、2010年代に日本の安倍政権、イギリスのボリス・ジョンソン、アメリカのトランプ、こういった、いわゆるポピュリストが台頭した理由はやっぱりあります。リーマンショックで新自由主義というか金儲けがすべてだという考え方は一回挫折したはずですが、実は、そのときに税金が投入され金融危機を救済した。しかし懲りずに、またほとぼりが覚めたら、富の集中がすすんでいる、格差が広がっている。普通の人は苦しむ一方で、大金持ちはますます富を貯めている。強欲資本主義が続いています。人びとは、そういう強欲資本主義に対決しない、弱腰の政治家にはもう飽き飽きしたという感じで、従来とは違う、強そうなの、あるいは強いものに向かって、公然と罵声を浴びせ、悪口を言うような政治家を見て、期待する。だから、アメリカやヨーロッパの場合、移民・難民がどんどん入ってくる。人間が平等だとか、個人の尊厳が大事だみたいな、建前に疲れた人びとは残念ながら出てきます。そういう人たちは、肌の色がちがう、生き方がちがうとを感じるLGBTは変だ、みたいなかたちで排除したい、排除して喜ぶという人たちが残念ながらいるわけです。

民主主義とポピュリズムは微妙な関係で、民主主義あるところ、ポピュリズムあります。それは一概に否定できません。民衆のエネルギーを解放することは、民主主義の原動力という面もあります。だから、特権を持った金持ちやエリートに対して、あいつはけしからんという民衆の怒りを向けて改

革をしたという例は、過去にいくつもあります。しかし、民衆のエネルギーが暴走すると、1930年代のドイツや、いまのアメリカのような問題が起こります。

民主主義を徹底していくというのは、良いことだと言いたいけれども、民主主義を発動する際に、必要な条件をすっ飛ばして、とにかく民意を問えばいいということで、選挙や国民投票をすると民主主義の自己破壊という問題が起きます。その典型例が、2016年のイギリスにおけるEU離脱の国民投票。イギリス国民の52%はEU離脱を選んだ。実際にいろいろやってみたら、あれは失敗だったというのがいまのイギリス国民の多数の意思です。だけど、もう後戻りできない。

トランプが大統領になった。なぜかという、共和党の大統領候補になれたからです。なぜ共和党の大統領候補になれたかという、アメリカは特殊な世界です。日本では政党のなかで政治家同士が競争しながら、派閥のボスになり総裁候補になりという政党のなかの政治家同士の戦いがあります。それはそれで問題がありますが政治家には一定のレベルが確保される。トランプは政治の経験ゼロ、経営者としてもいろいろ失敗してきました。しかし、金は持っている。アメリカの場合、予備選挙という仕組みがあり、一般の党員の投票で候補者を決めます。予備選挙で、投票に行く人は、一般の本選の投票よりも少ない。共和党の予備選挙に行く熱心な共和党員は、もともとと保守的で先ほどから言っているような本音剥き出しみたいなマッチョなおっさんとかが多数派なわけです。そうすると、トランプみたいな人が女性を差別するとか、移民を差別するとかと言うと、「よく言った」、「すつとした」そういう感じで支持を集めます。だから、本来予備選挙は、候補を選ぶ段階から民意を反映させる徹底した民主主義ですが、それが悪用され、トランプみたいなとんでもない差別主義者が大統領候補になり、本選でも勝つのです。

民主主義を徹底するということの、ある種の危うさについて、わたしたちはよく理解をしておく必要があるし、民主主義を実行するうえでは、単に民意を表現する手前で、いくつか必要な手続きや条件があるということにも理解する必要があります。

立て直しの方法はなかなか難しい。学者の悪い癖で、問題の原因はこうでこうでと分析するのはそれなりにできます。「ではどうするの?」とみなさんが聞くと、わたしももごもごとなりますが、最後にわたしの考えを申し上げます。

④民主主義をいかに立て直すか

1) 現状と課題を正しく認識する

たとえば、戦争の時代がきたら本当に大変です。いきなり日米安保をやめるとか、自衛隊をなくするのは無理です。しかしながら、中国との話し合いをつづける努力をする。できれば朝鮮半島とも、アジアの平和をつくるための交渉をする、そういう努力をすることが大切です。一方で、自衛力のあり方について、吟味する。閨雲に防衛費を増やしてGDP2%と言って安全が高まるわけではありません。現状と課題を正しく認識することが必要です。

実は、日本を滅ぼしうろ怖い敵はどこにいるか、わたしは外側にいないとは言いませんが、最大の脅威は内側にあるわけです。そこを言いたいです。

○状況の厳しさを認識する

100年後に日本社会って本当にあるの?という問題です。さっきの人口のグラフも、その一つの表れです。社会保障・人口問題研究所が一昨年出した人口推計によれば、2070年、日本の総人口8700万人です。そのうち10%強が外国人であるという予測があります。1年に生まれる子どもの数は、もはや70万人を下回るというニュースがこの間ありました。つまり、この社人研の人口

推計の一番悪いシナリオよりもっと悪いペースで子どもの数が減ってきています。そうすると、日本社会っていつまで持つの?という話ですね。あるいは、女性の権利を抑圧する、外国人を排斥する保守の人は、一体全体、どういう日本を守ろうとしているのか。そういうことを根本的に考えていくことが必要です。

2) 事実を踏まえた議論

二つ目は、事実を踏まえるということです。単純な解決策は往々にして、偽薬です。いま、ネットは便利なものでもあります。たとえば人口の変化や財政状況は、ネットでいろんなデータをすぐ調べられます。だから、事実をねじまげた根拠のない主張に対して、わたしたちは疑いの目を向けていく必要があります。これもいろいろ例がありますが、ネット空間を見ると、生活保護や健康保険など外国人を優遇してるなんていう人がいますが、んなのは全部嘘です。そういうのは、厚生労働省のデータを見ればすぐわかる話だということです。

3) 民主政治の基本的価値の再確認

三つ目、民主政治の基本的価値を再確認するということです。昨前期のNHKの連続ドラマ、「虎に翼」は本当にいい番組でした。わたしは生まれて初めて連続ドラマを全部みました。日本国憲法の第3章、人権のところをもう一回みんなで読み直す、これがやっぱり必要ですよ。憲法に書いてあるような前提を共有したうえで、考え方が違う人と共存していくというのが民主主義の社会です。他方、前提を共有しない、つまり差別を公然とする、人の人権を否定する、そういうものは闘わなければいけないと思います。

4) 権利のための闘争

最後、権利のために闘うということです。わたしたちは権利を自分で守らなければならない

局面にきています。動けば変わる、闘えば変わるという、社会の仕組みは物事を動かせるという感覚を持たなければと思います。選挙、世論、裁判などさまざまな闘い方があります。これは一つの例、日本の例ではありませんが、日本でいえば出前のウーバーですね。あれは、労働者じゃなくて個人事業主として扱っていて、労働法の適用を免れているというずるいやり方です。だから、労災保険もないし、有給休暇もない、団体交渉権もない。それについて、ウーバーで働く人も労働者なんだというかたちで、裁判を起こしてイギリスではその訴えが認められました。ウーバーで働く人が組合を結成して、賃金交渉や労働条件の交渉をしたりできるようになったというニュースがありました。日本でもこういう課題はいっぱいあると思います。だから、本来の権利を守ることに、なんら躊躇する必要はありません。

イギリスでの新展開最高裁は19日、米配車サービス大手ウーバーの運転手について、個人事業主ではなく従業員として扱われるべきとの判断を示した。これにより、数千人の運転手は最低賃金や有給休暇が認められる可能性が出てきた。

BBCニュース 2021.2.20



民主政治は、本当に難しい局面を迎えています。人類の歴史をみれば、いろいろ難しいことがある時代の方が普通でした。わたしたちは、これから日本の世の中をもうちょっと建て直すために、本当に具体的な課題にこれから取り組んでいきたいと思っています。ということで、ちょっと時間が過

ぎましたが、わたしの話はこの辺で終わります(拍手)。

質疑応答

◎「日本の戦争責任について。あるいはドイツとの対比」という質問です。ドイツとの対比でいうとヒトラーの自殺したドイツと、天皇が生き残った日本の戦争責任の取り方の違いは、大きいと思います。天皇制が残ったことにより本当のところでは責任の追及ができなくなった。ドイツの場合は学校教育を通してきちんと戦争を総括し、質問された方が書いているように、若い世代が親たちに対してアドルフ・ヒトラーの蛮行を本当に知らなかったのか突き上げるということがありました。

いわゆる団塊世代というか学生の闘争をした世代が何を残せたかと考えると、ドイツは戦後生まれのロベルト・ハーベックがその世代から政治家が出てきているわけです。緑の党という政党を広げてドイツの政党政治家を担ったこともありました。そこらへんは上の世代の責任追及をしながら、自分たちで政治の新しい局面を開いていったということがすごいなと思います。別に日本の団塊世代がダメだ、というつもりはありませんが曖昧な連続性のなかで本当の意味での過去との対決をしなかった。さっきの話のなかでも言いましたが、エリートの無責任に関してものすごい連続性があった。それに戦後生まれの人間のなかでも加担した人はいっぱいいたということだと思います。

◎「原水禁運動の評価について」という質問があります。これは、核兵器の問題性を世界に教えるという意味では功績があったと思います。ノーベル平和賞も取りましたが、原水禁運動がもしなかったら、核兵器がどんなに悪いものか世界中の人はそんなに考えなかったと思います。それは将来、核をなくすために、絶対に不可欠な前提だと思います。

◎つぎは「ネット時代の政治的議論のあり方に

ついで」の質問です。ネット空間で差別的な言説があふれ返っている問題やさらにはAIがこれからさらに発達しデモクラシーはどうなるか、という質問です。これはわたしの世代ではよくわからない世界です。ネット空間を政府の権力、法律でコントロールするのは法律的にも、技術的にも難しいことですよね。民主主義や人権を守ろうという側も、わたしたちみたいに伝統的なメディア・活字で言うだけじゃなくて、次の世代の論客、オピニオンリーダーをどんどん育成して対抗するかたちで、ネット空間で議論をするという体制をつくらなければいけないだろうと思います。それは相当お金も投入し、人を育て、いろんな技術を開発してと、工夫をしなければいけないと思います。

◎質問された方が狭山闘争に触れられているのでそれについて若干感想を申します。石川一雄さんが無実を、冤罪をはらすことなく亡くなったのは大変残念なことです。黒川みどりさんの『被差別部落に生まれて』という岩波書店から出た本があります。それを読んで改めて石川さんの冤罪を再認識しました。あの本のなかで石川さんが拘置所に入れられたときに文字を教えた看守の話が印象的でした。「文字を読めないままだったらお前はそのまま死刑になるんだぞ」って一生懸命字を教えた。あるいはその看守の妻さんが国語辞典や勉強する道具を差し入れたという話があってやっぱり良心的な人間っているんだなと思いました。自分もそういう良心的な人間になりたいなと思いました。そういうことをともかく世の中にちょっとずつ広げていくしかないと思いました。

◎宗教と政治の関係、これも難しい質問なんですけれども「宗教的な理想が政治の理念に反映される宗教的な情熱が政治参加の原動力になる」ということは一概に否定すべきではないと思います。公明党という政党はどうなのかという質問もありますが、わたしは安倍政権時代に公明党がいてくれて多少なりともブレーキになっ

たという評価をしています。いなかったら憲法改正まで行っていたんじゃないかと思います。そういう意味では宗教的な理念を大事にする政党が存在することは別に必要な面もありますが、アメリカをみているとキリスト教福音派など、不寛容で狂信主義的で、かつ反知性主義的に政治に関わり悪影響を及ぼしているという面もあるので一概には言えないです。

◎「資本主義と民主主義あるいは自由と平等の関係について」という質問があります。自由と平等は、矛盾し得る、とりわけ自由が単なる経済的自由、金儲けの自由を意味するのであれば自由と平等が衝突します。しかし、自由はもっともっと広い概念、広がりのある言葉なので経済的自由だけが自由ではありません。あるいは金儲けしか価値がないみたいな生き方をしている人間は実のところ不自由です。特定の金に囚われている、囚われの状態は自由ではないということです。人間の自由の広がりを理解するとか、人間が自由に生きることがどういうことなのか、もうちょっと視野を広げて考えてみましょう。そうすると金儲けの自由だけを神聖視するような新自由主義を抑制していくことで、本当により多くの人が自由に生きられるような世の中になるというところでなんとか合意をつくっていかねばならないと思います。それは多分、労働についてのルールや税制などを議論をする際の一番の基本前提になるだろうと思います。

◎「民主政治の基本的価値の再確認のなかで日本国憲法第3章を読み直すという話がありました。憲法を読んでいる人は少ないと思うが具体的な方法があるか」という質問です。先ほども言いましたが、たとえば『虎に翼』みたいなドラマは憲法の意義を再確認するとってもいい教材になったと思います。わたしはテレビをあんまりみませんが、女性に対する差別を当然と考えてきたいままでの世の中の歪みをテーマにしたよう

な話や貧困格差の時代のなかで可能性を奪われている若い人たちの話などリアルな世の中と向き合うドラマは結構あると思います。そういうものが出来たらみんなでみし、素晴らしいと褒める。そうするとこういったテーマでドラマをつくとヒットするみたいな雰囲気生まれ、つくる側ももっと努力を続ける。そういったことが必要になるんだろうなと思います。ということで、わたしたちも努力が必要になると思います。

◎「就職氷河期世代への生活の改善をどう考えているのか、若い世代との交流論争、啓発をどうしていますか」という質問です。就職氷河期の人びとに対する対応はもう手遅れ寸前みたいな感じもあります。具体的な政策としては、社会保障政策を拡充していくことかとおもいます。ベーシックインカムみたいな、若い頃から非正規雇用で働かざるを得なかったような人たちに対して、ある種、底上げをするような給付のような仕組みを考えていかなければならないと思います。具体的な政策の中身は、経済政策や社会保障論など専門家の知恵を借りるしかありませんが、いまの40代後半あたりの人たちにとって本当に世代として割り食っちゃったという世代です。そこに対するキャッチアップというか底上げの政策を全体としてやることは、日本の社会全体にとっても将来に対するある種の自己防衛になるという合意をつくることはできるし、そうすべきだと思います。

◎「若い世代との議論ってどんなもんですか」という質問ですが、この話はこういう講演会で必ず出てきます。わたしはもう大学で40年教えています。最近なんか若いひとたちはいい意味で変わったなと思うことがあります。政治学のレポートとか、答案のできが割といい。みんながいいとは言いませんが、できがいい人がうんと増えました。自分で考えている人が増えたと思います。いろいろ事情を聞いてみると、いまの大学4年生あたりは、高校生のときに新型コロナウイルスで学校生活に

影響を受けた。全国一斉休校などいろいろ苦労していて、世の中に目を向けている。もう一つ大きいのは、大学入試制度改革の混乱で、英語の外部試験の導入という騒ぎがありました。高校生も学校教員も反対の声を上げ中止に追い込みました。高校生が文科省の建物の前で集会をやったりして、ニュースで報道されたりしました。そういうことを高校生、中学生のときに見ている。いまの大学生やちょっと上の世代の人たちはいい意味でおとなに対する疑いの目を持っている人が多いです。おとなは、とんでもないバカなことをする。そして、バカなことをしそうになったら自分たちが「それはダメだ」って言わなければならないと思っている。言えればそれで変わったみたいな成功体験もあるということで、わたしは最近若い人に期待しています。わたしが学生の頃、そんなに問題意識を持って何かを表現することはなかった。時代は大変な時代に入っていますが若者は世の中をちゃんとみているなと思います。

◎それから「イギリスでの新展開」、これはポピュリズムの後の話ですね。イギリスは保守党が長期政権を維持し、大混乱を起こして、結局、昨年の選挙で政権交代が起きました。現在、労働党が政権を持っていますがなかなか経済的な環境が厳しくて社会保障を伸ばすとか、人びとのためになる政策が展開できなくて本当に苦労しているという状況です。政権交代すれば世の中が変わるなどというような期待が持てないのは本当に苦しい状況だろうと思います。その意味では日本の参議院にもなるわけです。いまの自民党政権はとんでもないと思いますが政権交代すれば変わるかというそんな簡単なものでもないだろうと思います。もがき苦しみがちよとずつ変えていくしかないという感じだと思います。

◎あとは「目の前の日本の政治についてこれからどうなるか」みたいなお話ですね。あるいは「立憲民主党はどうなんだ」など、そういう質問が

あります。あるいは「市民が受動的じゃなくてちゃんと動く、実践するというのが大事だ」というご意見も。それは本当にその通りなんですけど、わたしは別に立憲民主党に何か影響力を持っているなんていう立場じゃないので、本当に困ったなという感じです。あるいは「選挙における野党の協力はどうなんだ」という質問もあります。

去年の10月の衆議院選挙で、久しぶりに自民党が大敗して個人的には選挙の開票番組をみながら祝杯をあげるの是一件何年ぶりだろうという感じでその日の夜は喜んでいました。しかし、翌日、選挙結果を全部みて、さあこれからどうなるかと考えたら、もうお祝い気分が全部吹っ飛びました。本当に混乱ですね。自民党がもう歴史的役割を終えたということは一つ言えると思います。先ほどから言っているように経済的停滞の30年、人口減少の始まりなど構造的な問題は15年、20年言われ続けてきたけど全く有効な対策がありません。アベノミクスは大失敗に終わった。そういう意味で自民党は本当に政治家が権力をシェアするための政党なんだということは明らかになりました。しかし、その代わりになるものがどこにあるかというところが見えない。2000年代は、小泉の構造改革後、格差貧困が見えてきて民主党へスイッチしようと政権交代が起きました。多少いくつかいい政策を始めかけましたが、消費税の問題で内部分裂し、その後、本当に政権交代は夢のまた夢みたいな状態になりました。いまどうか。自民党が過半数割ったのに野党が政権交代を起こすために協力をしていくという機運が全然広がらない。国民民主党も維新も自民党の餌に食いつくというか、手柄争いをしてみみっちい政策提言を自民党が飲んでそれを自慢するみたいなかたちで、本当に世の中を転換するために政権

交代を起こすというような機運が広がっていったという現状です。

2010年代の後半、わたし自身、野党協力のつなぎみたいな運動をちょっとしました。これもちょっとなかなか難しい。それぞれの政党がもう独自性を主張して今度の参議院選挙もそれぞれ候補を出すという構えです。負けても選挙区で候補者を出して比例で票を取るという戦術を各党が追求している状況なので野党協力の可能性は本当に難しいと言わざるを得ません。

◎「立憲民主党という政党をどう評価するか」。
わたしはいまでも期待はしていますが政権ビジョン、かつてのマニフェストみたいなものをもう一回ちゃんとつくり、いまの自民党政権で絶対できないことをやっていこうみたいな作業が全然すすんでない感じです。だから本当に手がかりがなかなかないという状況が続いています。ただそれは立憲民主党にしっかりしろと突き上げるということが必要だし、政権交代に向けてもうちょっと野党が協力をしていかなければいけないんだという機運をどうやって高めるか。本当にわたしも頭抱えている状況ですが、国民民主みたいに、手柄争いをして自民党に小さな提案を飲んでもらって喜ぶような政党はなんとか一回負けさせないといけないと思います。あれがいま彼らのビジネスモデルになっていますから。政治の混迷はしばらく続くと思いますが、立憲であれ、社民であれ、あるいは共産党も含めて、政権交代で目指すべき基本的な政策は3つか4つぐらいで良いので、とにかく政権交代で実現すべき政策、日本社会のつぎのイメージみたいな議論をするということ。それを求めていくということだと思います。ということで質問は一通りお答えいたしました。

(質疑応答の終了)

すみよしりん ぼ じ ぎょうすいしんきょうかい
住吉隣保事業推進協会のうごき

ご寄付のお礼

2025年4月から5月末までにご寄付をいただいたみなさまです。【友永健三さま、ハートフリーやすらぎさま、他1人】みなさまのご協力に感謝いたします。

合計561,000円 (今年度合計: 561,000円)
【2025年度 寄付目標金額: 150万円】

ご寄付は、公益目的事業の経費、住吉隣保事業推進センターの維持管理に使わせていただきます。ご寄付いただいた方は、税制上の優遇措置を受けられます。寄付額に応じて、個人または法人の所得から一定額が控除されます。くわしくは事務局にご相談ください。

【ご寄付の方法】

銀行振込、または事務局へご持参ください。ご寄付の際は寄付申込書に必要事項をご記入いただきます。

<事務局> 住吉隣保事業推進センター
住所: 大阪市住吉区帝塚山東5-6-15
電話: 06-6674-3732

<振込先口座>

大阪信用金庫 住吉支店 (店番号041)
普通口座 (口座番号 0115047)
口座名義 公益財団法人住吉隣保事業推進協会

賛助会員を募集しています！

賛助会員のみなさまには、機関紙『すみりんニュース』をお送りします。また、当法人主催の指定講座の参加費が半額免除になります。

<年会費> 個人: 3,000円 団体: 10,000円

【申し込み方法】 所定の申込用紙に必要事項をご記入のうえ、年会費と一緒にご提出ください。



当財団主催の研究会や各種生涯学習講座などのお知らせです

共同研究「不可視化への抵抗」研究発表集会
&住吉部落史研究会

『研究者と考える、住吉地区の人権のまちづくりと芸術』
共同研究「不可視化への抵抗: <日本美術史>と<世系と職業に基づく差別>に関する研究」は、これまで、第1回研究発表会を京都市立芸術大学で、第2回研究発表会を国立西洋美術館で開催しました。第3回研究発表集会は、住吉地区で開催します。金城実さんのレリーフ彫刻作品を軸に、住吉の人権のまちづくりについて考える機会をつくります。

日時: 2025年6月21日(土曜日)
午後2時から午後4時まで

場所: 住吉住宅集会所(大阪市住吉区帝塚山東5-6-1)

【報告者】小田原のどかさん(彫刻家・評論家、日本美術史、横浜国立大学教授) / 後藤田和さん(日本近代文学、広島商船高等専門学校教員) / 黒川みどりさん

(日本近現代史、静岡大学名誉教授)

【ビデオメッセージ】金城実さん(彫刻家)

【定員】40人 【参加費】無料

【申込方法】

直接来館・電話・ファックス・メールでお願いします。

ファックス番号 06-6674-3700

メールアドレス koza@sumiyoshi.or.jp

※①講座名、②住所、③名前、④電話番号をご記入のうえ、お申し込みください。



としょつ 図書室には、じんけんもんだい
かわる本や人気のある小説
やエッセイなどもあります。
ぜひ、ご来室ください。

かいしつようび じかん
【開室曜日・時間】

げつ か もく きんようび ごご じ ぶん ごご じ
月・火・木・金曜日午後1時30分から午後5時まで
※図書室の運営はボランティアのみさんによって支
えられています。臨時に休みになる場合があります。

しょうほう はいしん 情報を配信しています！	
ほーむ ペーじ ホームページ	ふえいすぶく Facebook
いんすたぐらむ Instagram	ゆーちゅーぶ Youtube

のぞいてみませんか

どっこい喫茶

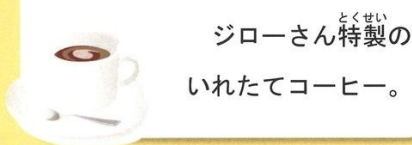
まいつきだい どようび
毎月第3土曜日10:00～12:00(変更になるときもあり)

すみよし隣保館 寿 1階 地域交流スペース

どっこい福袋 <無料>

- フードロス（食べ物を捨ててしまうこと）をなくすために、みんなで有効活用。
- ふーどばんく OSAKA のご協力です。何が入っているかは開けてからのお楽しみ。
- 事前に会員登録してカードを作ってください。

コーヒー <有料>



ごはん物・惣菜 <有料>

ごはん物や、季節ごとのおかずが
大人気で、毎回売り切れです。



低農薬野菜

せんしゅう
泉州アグリ
安全でおいしい野菜を販売。



パンプのお菓子 <有料>

えきまえ
駅前オガリ作業所で
作ったおいしいお菓子です。



ためになるカフェ <無料>

けんこう ながい せいかつ あんしん
健康で長生き、生活の安心など、
ためになるミニ講座。不定期開催。



どっこい喫茶は、地域のボランテ
ィア活動「どっこい隊」が実施して
います。

お問い合わせはすみよし隣保館 寿

(6674-3732)へ